

「脚下照顧」

『事務所移転のお知らせと徳川家康の関係』

ついに！テクア技研も事務所を移転することになりました！！

といっても、隣の隣の設計事務所さんが引越されたので、そこに移るだけなのでたいした距離ではないのですが、それでも普段、超音波槽の『ピー』という音が耳について離れない中で10年以上も事務をしてきた者にとっては非常に感慨深く、木原君と一緒にその事務所に移転のための下見に行ったとき『社長、やっとこんないい事務所に移れるようになりましたね！』と言われ、その『やっと』という言葉と、木原君の今までのテクアでの寡黙で献身的で何の不満も口にくることなくコツコツと努力をする姿がオーバーラップしてしまって、『すまんかったな～これでやっと木原君がいつ彼女を連れてきても恥ずかしくない会社になってきたぞ～』と心の中で叫びました。
したがってみなさん、準備は整いましたので、ぜひ木原君にかわいい彼女を紹介してください！！
この男の将来性は社長である私が保証します。『テクアの至宝』と呼ばれている男ですから将来ビッグになることは間違いはございませんので！！

で話はまた事務所のことに戻りますが、今の工場の隣の隣なので、また住所は『大樹寺町』となります。実は私はこの『大樹寺』にこだわっています。なぜなら『大樹寺』は、かの徳川家康公のゆかりのお寺だからです。徳川歴代將軍の位牌はすべてこのお寺に納められております。徳川家にとってもっとも大切なお寺といっても過言ではありません。

もうひとつこだわりを紹介させていただくと、私は『伊賀町』に自宅があるのですが、この『伊賀』にもこだわりがあります。なぜなら家康公が祭られている伊賀八幡宮があるからです。毎年行われている家康行列もこの伊賀八幡宮が出発点になっております。

『で、何でそんなに家康さんにこだわるの？』といわれそうですが、私がか家康公を好きなのは負けた後が立派だからです。

家康は19歳の時に桶狭間の合戦で今川義元が敗れたとき、自分の身の危険を察知し、家来十数名を引き連れて大樹寺に逃げ帰り、先祖の墓前で自害しようとする。

そこに大樹寺の住職が現れ、『厭離穢土、欣求浄土』（おんりえどごんぐじょうど）と諭され家康は自害を思いとどまります。この言葉は『この荒みきった世の中を、住みよい浄土にすることがお前の役目だ！』という様な意味で、これを機にこの八文字を家康は終生の座右の銘とし、天下統一に全精力を傾けることになりました。

もうひとつ家康の負け姿ですごいのが『しかみ像』です。家康30歳の時に三方が原で武田信玄に戦いを挑みましたが、武田軍25000人に対して徳川軍11000人でしたから、明らかに無謀の戦いでこっぴどく叩きのめされ、命からがら浜松城に逃げ帰ることになります。

この家康の負け姿が最低で、恐怖で漏らしてしまっていたらしいのです。それも、オッコだけでなくウチも！でもここからが家康の凄いところで、この自分の史上最低の姿を隠すどころか、絵師を呼んできて『信玄に対して恐怖で震えるわしの姿を絵に写し取っておけ！！』と命じ、描かせたのが有名な『家康のしかみ像』です。

家康はこの絵を生涯身近に置き、時々眺めることによって、二度とこんな情けない姿は見せまいぞ！と深く自分自身に誓い発奮して天下統一を成し遂げました。

人はどんなに地位の偉い人でも感情は凡人と紙一重だと思います。ですから偉い人に対してもそんなに気後れする必要はないと思いますが、ただし『本物』と呼ばれている人達は自分の『しかみ像』をみな心のどこかに秘ませ、マイナスの感情を反転させて大きな原動力に変え、腹を決めて歩き始めた年月が凡人である私たちより遥かに長いということに敬意を表さなければいけないと思います。（われわれは腹すら決まっていなかった場合がほとんどなわけですから・・・）。自分自身との戦いの歴史が長いということはそれだけ百戦錬磨だということだと思います。

やっとテクアにも『城』と呼べるような場所ができました。

心の奥にしまいこんでいたそれぞれの『しかみ像』を引っ張り出して、腹を据えて次のステージに踏み出しましょう！！

家康は豊臣秀吉にお前の宝は何だ？と聞かれたとき、他の大名は刀や茶器を家宝として自慢したのですが、家康は『私の家は三河の田舎ゆえ、人に自慢できる宝物などありません。ただ、私のために命を投げ打ってくれる500人ほどの家来がいます。これが私の宝です』と答えて格の違いを示し、秀吉をたいそう悔しがらせたそうです。

テクアも『至宝』ぞろいです！3Kの現場に創意工夫で臨み、思いやりの花を咲かせましょう。其の時にはおのずと機械メンテナンス業界の天下取りの道が開けるような気がします。これが我々の『厭離穢土、欣求浄土』だと思います。

感謝！！羽原篤史

